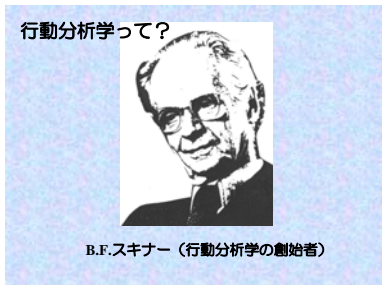


# FSJG 特別例会「いつでも最初の一步」

ファーストステップジョブグループ/立命館大学人間科学研究所後援  
特別例会 (2005.10.9 クレオ大阪東)

## FSJG の理論と実践

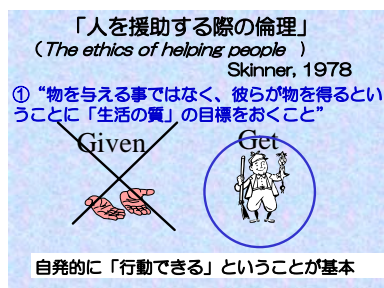
立命館大学 望月昭



**望月：**現場の生々しい話、ファーストステップジョブのお話のあとで、ちょっと余計なことなんですが、いま上田さんがやられてきた実践というのは、必ずしも現場の思いつきというわけじゃなくて、そのもとにある立場、考え方が基本にあります。その考え方の基本が「行動分析学」(Behavior analysis) という立場です。このことをちょっと、やや一般的なかたちでみなさんにご紹介して、さらに FSJG の活動のあり方、一見非常にユニークではあるんですが、考えてみると、わりと「理の当然」であるというところがある。そういうことをご紹介したい。

### FSJG の理論的背景：行動分析学

**Given ではなく Get：**行動分析学というのは、この写真に出っていますが、ご存知の方がいらっしゃるかもしれませんが、B.F. スキナーというアメリカの学者でもう亡くなりましたが、このひとが立ち上げたものです。日本にも来たことがあるし、アメリカで一番有名な心理学者であった時代もありました。さっき上田さんも少しお話ししかけたことですが、われわれがひとを援助する際、何を一番優先しなければいけないか。そのもとには、一番いったい何が生きているうえで大切かという、かなり深い哲学も含んでいます。



そのひとつは、何よりも、「ものを与えられる」ということではなく、かれら自身が「ものを得る」ということです。ギブン (given: 与えられる) ではなくゲット (get: 得る) する。そういうことに、生活の質の目標をおくことが大切だということです。このことは、ただ黙っていても何かをもらえるというかたちで保障されるのではなくて、どんな形であれ、自分で行動する。行動して何かを得ていくことがとても大切だということなんです。このことを本人から奪うような援助の仕方は決してしてはならないということです。このことを今回の話にあてはめれば、ジョブ、働くということは、それは社会関係を結ぶことであり、つまりある行動をすることで、社会的評価を得る、実際にはお金を得る、そういうことも含まれます。

②罰やそれを背景とした「負の強化」でコントロールされるのではなく、「正の強化」でなされるように環境設定を整える。(Skinner,1990,「罰なき社会」)

解説:「行動」には2種類ある。

○正の強化で維持される行動:続けたいと思える行動  
●負の強化で維持される行動:いやいや行う行動

↑

「正の強化」で行動が維持されているときの状態=われわれは「自由」と感じる  
Skinner,“Beyond Freedom and Dignity”

**正の強化と負の強化:**次に、行動するというのに関して、ゲットする(=行動する)ということにも、積極的なものと、同じ行動するにも嫌々するというものもある。スキナーが2番目に大切だといったのは、罰やそれを背景とした「負の強化」、ちょっとこれは専門的な言葉ですが、それでコントロールされるのではなくて、正の強化でされるように環境設定を整えなければいけない。これは

日本に来たときのきの有名な講演録ですが、『罰なき社会』というものがある。これはスキナーが障害にかかわらず、今、世の中が実現しなければいけないことだが、なかなかそれが実現されないという話です。行動には2種類ある。正の強化と負の強化で維持される行動です。正の強化によって維持される行動は、本人が「続けたい、もっとやりたい」と思っているような行動です。それに対して負の強化によって維持される行動とは、簡単にいうと、いやいややる行動です。これはやらないと、誰かにしかれるとか、いつまでもガミガミ言われるとか、そういう形で、やったらほっとするんだけど、自分でこれをつかんだという感じではなく、嫌なことを避けるためにやるということです。行動はこの2種類によって行われているんです。みなさん自分の生活を考えると、ある部分は積極的にどんどんやり続けたいけれど、ある部分はやりたくなくてしょうがないところがあるでしょう。

われわれが正の強化によって維持されているとき、われわれは「自由」と感じる。自由だということが究極の目標ですね。生きていくうえで、自発的に自由に生きていけることはとても大切なポイントです。自由というのは、宇宙の中で漂っているのが自由ということではなくて、やっぱり社会のなかで誰かから、あるいは自分のやることそのもの、また環境から何か良い結果を引き出す、満足のいくような結果を引き出す、そういう関係のなかにいるとき、われわれは正の強化をうけているという。それを自由と感じる。さきほどの、「行動すること」が大切なポイントなのです。与えられるのではなくてゲットしていくことが大切。行動でも、嫌々やるのではなくて進んでやっていける、そういうものを拡大するのが人生なによりも大切です。対人援助、人を助けるときも、そのことを満たすようなやりかたでやらなければならない。

③対人援助の作業における共通のミッション(目標)

一人一人の個人において、**正の強化で維持される行動の選択肢を拡大する**

↓

それぞれの個人について、「やりたい」と思える行動を成立させ、さらにその選択肢を増やすことを支援する

「やらなくてはならない」(負の強化)ではなく「**すすんでやりたい**」(正の強化)を支える

**援助の共通ミッション:**3番目に、今申し上げたことですが、対人援助の作業における共通のミッション、目標はどうなるかという、ひとりひとりの個人、みんな同じではありません。**ひとりひとりの個人によって、正の強化によって維持されるような行動の選択肢を拡大していくこと。**わかりやすくいえば、それぞれの個人についてやりたいと思える行動を成立させ、さらにその選択肢

を増やすということ。それを支援することが共通のミッションだと思います。やらなくてはならないという、そういう思いでやるのではなく、進んでやりたいと思えるような行動

を成立させて、それを支えていく。ご自分のことを考えても分かると思います。ピンチのときや気が滅入っているときは何もかも嫌だなと思っていて、「仕方が無いからやる」という状態になります。それが、いろいろなきっかけで、自分の工夫で、やり続けたいと思う行動もある。同じ人生だったら、正の強化に満たされた行動、そういう人生を送りたいと思います。当然ながら、他者に対する援助もそういう主旨でやっていかなければならないと思います。

### 負の強化の末路：



このスライドは、JR のこのあいだの事故です。あそここの職場体制はどうなのかということ、非常に特徴的な、われわれのほうの専門から言えば、当然事故が起こるだろうという職場的土壌がある。ご存知のように日勤体制とか、上手くいったらほめられるのではなくて、ああいう仕事では上手く行って当たり前、失敗したらひどい目にあわされるというそういうやりかたでやっている。これは先ほど申し上げた「負の強化」

で維持される行動です。失敗したりうまくやらなかったりすると、罰がくる。叱られたり罰金を払ったり草むしりをさせられたりするというようなことしか待っていない状況だと、いったんミスを起こしてしまうとパニックになってしまう。ぱっと罰の情景が目にかんじると、実は非常に身体的な反応が出てくる。みなさん今日はいろんなお年の方がいますが、自動車教習所なんかにも昔は怖い先生がいたんですよ。ぼんぼん叱って教える先生がいた。それはうまい教え方ではない。本人のために叱るとか言うんだけど、ガンと叱られると、activation syndrome という専門語があるんですが、汗をかいたりどきどきして、やらなきゃいけないこともできなくなる。亡くなった運転士さんもいくつか失敗を重ねています。これが、この次に気をつけようということをもっと建設的に受け入れてくれる状況だったらよかったです。もう失敗を隠さなければいけない。でも隠せないかもしれない。それでもう頭のなかがパニックになってしまう。

ですから、仕事するときにも正の強化で維持しないで、こういう負の強化で維持されるというのは非常によろしくない状態です。こういう事故につながってしまう、パニックになってしまうような状況もあるし、そんな風に人が人をコントロールしようとする、多くの場合は、逃げだしてしまう。その場を脱してしまします。それができない場合には、攻撃が返ってきます。カウンターコントロールと呼ばれるものです。罰や叱責によってコントロールすると、表面的には一瞬恐れいますが、不安がたまって、願わくば別のところに行きたい、あるいは本当に追い詰めると、カウンターコントロールが起こる。だから罰や負の強化によるコントロールは、結局いい結果をもたらさないんです。

ところが、われわれは知らず知らずのうちに負の強化や罰を使ってしまう。じつは、脅しや脅迫的な人の支配は、ひとつだけいい点というか、メリットがある。それは即効性があることです。ぼんと叱るとやはり一瞬相手が恐れいる。ですから、長い時間かけて、丁寧にはほめてだんだん力をつけていこうという形ではなくて、間違ったら叱り、焦って何かをしようとするやりかたは、一見すると労力がなくて済むんです。叱るということはそれ

ほどエネルギーを使わないわけです。そんなわけで、なかなか脅しや脅迫的な方法は人間の社会の中でなくならないんですね。

いろいろな人間というのは色々嫌なことを避けていくのが基本的な本能ですが、病気や辛い労働とか、いろいろなものから科学的な進歩によって逃れることができているようですが、人が人を動かすことに関しては、まだなかなか暴力を使ったり攻撃を使ったりすること、それがやまない。他の科学的な進歩に比べてずっと遅れているわけです。それが証拠に、戦争はなくならない。攻撃を受けたらカウンターコントロールするというのをやり続けている国があるわけです。もちろんあれは攻撃の連鎖を生むわけで決してよくなるわけがないんですね（スキナー「罰なき社会」参照）。

### 日常的な負の強化の配置：

戦争や事故の問題はありますが、もう少しじんわり来るような負の強化というのは、わりと日常ではいっぱいあるわけです。その状況が学校や社会にもまだまだたくさんあるわけです。そのなかのひとつに、われわれがこれまでそのことは当然だと思っていたこと、あるいはそれが本当に良かれと思って子どものために考へていたこともある。ちょっと書きましたが、絶えず「よりよい存在であれ」という考え方ですね。自分の子どもに対しては当然思います。いまよりも将来よくなるために、叱ったり勉強しなさいという言い方をしちゃう。ときには、「中間試験はこの日でしょ」と横からガンガンという形で勉強させる。われわれのいまの日常でもいっぱいあるわけですが、時間を与えない状況がたくさんある。時代の流れの中で、そうした状況は良くなるかと思ったら、最近ますます悪くなっています。効率一辺倒であるとか、コストパフォーマンスとよくいわれる。公務員なんかもそうですが、大学なんかはつきりいってそうなんです（笑い）、どんどん仕事が増えているわけですが、なるべく安いお金でやろうとするので一人のひとにプレッシャーがかかる。短時間のうちに効率、効率といって、ミスを犯したら大変だという状況がまた起こってしまう。そうすると、もっとやりたいという積極的な気分ではなくて、ミスしないように、失敗しないようにするにはどうするか、そういう形で動いてしまう。

われわれは知らず知らず「罰」や「負の強化」を用いて人を動かそうとしてしまう。

- 「おどし」や「脅迫的」な人への支配には、即効性がある。努力も少なくすむ

威圧や暴力を使わなくても「負の強化」となってしまう状況が学校や社会にはたくさんある。

たえず「よりよい存在であれ」とする状況や「時間を与えない状況」

従来の「発達」といった言葉や概念もそうかも知れない。

### 発達？

さらにもっと踏み込んでいくと、いままでの教育や心理学ではかなり自明なことと言われていたような、「発達」という言葉。よくお聞きになる言葉だと思いますが、これもある意味ではよりよい存在になろうとする、そのためにはどうしたらいいのか。そこまできなくても、何歳になったらよりよくなっていくのか。

それが一番多いんですが、発達という言葉や概念も、あまりそれを脅迫的にだされると、赤ちゃんを育てているときに、何歳ではどこまでいかになくてはいけない、ちょっと遅れたらどうしようということになる。もう少し落ち着いて構えていればいいのに、ちょっとスタンダードなものから遅れてしまうと、うちの子はどうしようかと焦ってしまう。皮肉なことに専門分野のテキストとか学問が、心配を煽るような状況もないとはいえない。

大学の心理学というものは結構そういうところがありまして（笑い）、要するにひとの心配で食べているようなところがある。このやり方は実はよく考えるとおかしいんですね。安心させてくれるための心理学、発達があるかどうか。心配させるためにあるんじゃないか。私もそれで商売しているんですけども。どうもそんなことがある。

### 正の強化で維持される行動の選択肢の拡大

能力（単独能力：ability）の向上によって社会的に強化されるようになる。（ではない）

援助つきでも「行動」（やりたい）が、今、成立するようにする

●人間は「発達」するために生まれてきたのではない

さっきから申し上げているように、スキナーという人が言いたかったこと、FSJG が考えていることは、あくまで**正の強化で維持される行動の選択肢の拡大**。

ある意味、非常に能天気な明るいテーマなんです。このことは、さっきはちょっと発達のことを申し上げましたが、発達で言われているような、ひとりの能力、知能指数とかスキルとか、そういうものの向上によって、向上したら社会的に出られるよ評価されるよ、というのではないんですね。スキナーがいていたのもそうではない。力がついたら社会に出られるという、そういう図式は非常に自然で、われわれもそのために頑張ってきたし、子どもにもそういうことをやってもらいたいと思うし、もちろんまるまる違うというわけではないんですが、よくよく考えてみると、こんなふうに分で一生懸命伸びるとか、お尻をたたいて伸ばすというのも言葉としては一般的ですが、そのものをもうちょっと疑う目をもってみななければいけない。

### ひとは発達するために生まれてきたわけではない：

われわれは、生まれてきたからには、大事なことは何なのかというと、援助つきでも「やりたいと思う行動が、いま成立する」ことが大事なんじゃないか。われわれは伸びるために生まれてきたんじゃないで、いまを楽しむために生まれてきた。そういうふうを考えてみたい。私の好きな言葉なんです、前に花園大学にいらした浜田寿美男さんという方が、「人間は発達するために生まれてきたのではない」といっている。発達なんていう言葉は人類が生まれてからずっとあとのほうに誰かが捏造した言葉です。われわれは楽しく生きるために生まれてきた。「遊びをせんとや生まれけむ」という言葉がありますが、まさにそうだと思うんですね。これはやっぱり基本的に原点として見直さなくてはならない。日本では、これまで高度経済成長期以来、どんどんよくなるという時代があって、それはもちろん楽しくもありましたが、そのなかで実はやっぱり追われてきて、でもそのころは、どんどん資源が拡大して、大きくなってきたから、競争することがつねに正の強化を受ける、そんな時代でもあった。いまはもう違いますよね。同じパイを食べあって、誰かが成長する力をもつことによって、下手をすると誰かが何かを失ってしまう。勝ち組、負け組みみたいな変な世の中になっている。そこで今までの、よりすぐれたものであろうとする、そういう強迫的な学問体系でなにか考えてしまうと、ちょっとやっぱりまずいことが起こってしまう。原点の、何のために生まれてきたのかをもう一度問い返す必要がある。そういうふうに思うわけです。

行動分析学（あるいは心理学や教育学）の一般的な理解のされ方：

- 「より良いもの」となるために、本人の行動を変容させる。そのために「ほめる」（手段としての強化）
- 「より良いもの」となった場合に初めて「ほめる」

Skinnerの晩年の嘆き：



「わたくしは、人の行動を変えろと言った覚えはない。つねに正の強化で維持できる環境設定を整えろと言っただ。それなのに最近の若いやつらは、ほめりゃいいと思って・・・」

### 強化とは「今を認める」こと：

それで、行動分析学、行動療法とか、あるいは行動主義という名前でもどこかで習ったことがあると思いますが、一般的な理解のされ方としては、個人をよりよ

いものとするために、本人の行動を変容させる。そのために褒める、というようなものと思われる。それは、手段として正の強化を使うということなんです。ともかく行動分析は「褒める」というふうな解釈です。褒めることはもちろん大切なことで、けなしたり叱ったりするよりは良いものですが、それは「上手くできたら褒める」という感じになりますね。よりよいものになった場合にはじめて褒めるということです。そんな風感じます。しかし、それはそうじゃないんです。とにかくそういうふうにとらえられがちだがそうではない。スキナーの晩年の嘆きで実際に言っているんですが、「わたくしは人の行動を変えて社会に適応するように行動をかえていくことを主張したことはない。そうではなくて、つねに正の強化で維持できる、やりたいと思えるような行動が生活のなかにあるような、そういう環境設定を整えろといったんだ」と。これは先ほど言ったように、発達していくことを目指すんじゃないで、今生活しているひとがみんな正の強化を受けるように環境設定を整えようということです。その発想をまちがえて、アメとムチでペシペシやればうまくいくよとだけ考えてしまう。もちろん、そういうことは確かにあって、そういうテクニックも山ほど行動分析はもっているんですが、ほんとうの真髄はそこにはなくて、あくまで「今できることを強化して、本人の行動の自発性を高めていく」そういう風に考えていたのですね。

真面目な人が、応用としてやろうとすると、つい障害のあるひとを、どうやって褒めたら、いろいろできるようになるか、という風に考えます。確かにもちろん、それはできるようになる。非常にパワフルなツールで、ぼくもそういうテクニックを全部教わっているんですが、大切なポイントは、先にいって、良くなったら褒めるんじゃない、あるいは、できるまで待つて出来たら褒めるんじゃない。

大事なものは、今を褒めること、今できること、今やることを褒めるってことなんです。将来より良きものとなるために褒めて、その気にさせるというのではなくて、行動分析の真髄は、そしてこれは FSJG の方針の真髄でもあると思いますが、徹底的に「今を認める」ということなんです。何を認めるかということ、さきほどからお話ししているように、ギブンではなくゲット、何らかの自分の主体的な行動に対して、それを現在、ここが重要なところですが、援助つきでもいい、いろんな手助けを得たうえでもいから成立させる（認める）ということです。何かをなしうるというのを、まず単独でやらなくてもいい、手助けがあってもいから成立させてしまう、そういうことが大事だということです。

(将来)より良きものとなるために、誉めてその気にさせる。(正の強化を手段とする)

.....のではなく

行動分析学の神髄は、

**徹底的に「今」を認める**

“given”ではなく“get”すなわち「行動」を、現在、援助つきで成立させる(強化する)環境設定をする

**徹底的楽観主義：絶対なんとかなる**

本人の属性(障害や疾病)に、「できない原因」を絶対求めない。不足している環境条件を探す!

援助つきで行動を成立させるということが、障害や何かの問題をもっている人にはあてはまるけれど、ちょっと特殊ではないかと思われがちです。しかしわれわれの日常的な行動もみんな援助つきですよ。ほんとうに裸一貫のみで生活できるのではなくて、いろんなひとに手助けをえて過ごしている。今日、例えば、みなさんも、ここにいらっしやっているわけですが、

きょうの晩御飯の支度は誰かにお願いしているかもしれないし、今日誰かに留守番を頼んでいるかもしれない。という場合に、いろいろなかたちでわれわれは援助を受けてやっている。ただ障害のあるひとや、ある特別な課題を抱えている人は、多数派の人とは形の違う援助になっていて、それは少数派だから目だってしまう。でもみんな同じように実は援

助を受けている。行動というのは、一人で出来るわけではなくて、みんな社会生活のなかで生きているわけです。ジャングルの中で一人で住んでいるのではない。

そういう意味で、援助つきで行動が成立しているのは別になんでもありません。その当たり前のことを、今確実に実現していこうというのがスキナーの表現でもあるんです。徹底的に今の行動を認めて、今の行動が成立するように、いろいろな環境設定をする。そのなかには物理的な設定もあるしや人的なお手伝いがある。

### 徹底的楽観主義：

もうひとつの行動分析の真髄は、徹底的楽観主義です。ひとことでいうと、絶対何とかなるという発想です。「絶対何とかなる」というと、大きく出たなということになります、ということかということ、本人の属性に事の原因を求めないということです。いま支援しなくてはいけない当事者の障害とか疾病に現在の問題の原因を求めないということです。社会的な関係を持ちにくいというのが社会的ひきこもりの状況です。そのできない原因を、絶対本人の属性に求めないということです。あの人はちょっと知的に低いからとか、ちょっと性格がもともと自閉的などころがあるとか、そんな言い方を絶対しない。あくまでも不足している環境状況を絶えず探し出そうとする心意気を持っている。これは行動分析の「行動」たるゆえんですが、行動というのはあくまでも社会的な関係の問題です。援助つきというのも関係の問題です。これまで、多くの「心理学者」は本人の性格、発達段階、といったことを言います。あるいは、過去のヒストリーにさかのぼる場合もある。親子関係がどうか、お母さんがどういうふうに接したのかとか。ついわれわれはもっともらしい話にひかれますね。でも、行動分析はそれに一切こだわりません。確かに何かあったのかもしれない。でも今それを言ったってしょうがない。今現在どうなっているのか、何が足りないのか。それはもちろん親御さんの振る舞いも含まれるかもしれませんが、過去とか本人の属性のせいだといってしまうと作業はストップしてしまう。心理学者の中には、いろいろな教育方法を使ってそれでも出来なかったとなると、最終的に出来なかったのは、本人の発達段階がそこまで至ってなかった、などと論文にまことしやかに書くバカがいるんです。「じゃ今までお前は何をやっていたんだ」と。最後にひっくり返すんだったら、いっそやるんじゃないよ。ぼくは論文の査読をやりますが、そういうのは全部没です。「最後に何をいつているんだ、お前は」。ぜんぜん誰も励まされない。「そこであきらめるんじゃない、何か足りないんだよ」。ここでいう楽観主義は、結構自分に厳しいともいえるんですね。楽観主義とは、何か出来ないのは発達のせいとか、生物学的な根本的な理由がある、といった形で作業をストップしない。そうではなくて、いや何かがなかったと。さっき援助つきで行動が成立すれば言いと言いましたが、いろいろな援助手段がありうる。援助手段を試したらいいんですよ。どうも一人でやらなくてははいけないという強迫観念があります。最後まで一人では出来ないこともある。でも、さっき言ったように、ぼくたちはそもそも一人では何もやっていないんです。最重度の障害があるひとだって、行動の選択肢が与えられれば、援助つきで出来るんです。カードしか使えない人でも、選挙もできるんです。このあいだ、うちの大学の試験ではそれを出しました。どうしますかといったら、みんな面白い答えを書いてました。

反応の形にこだわらなくていい。その人にやりたい形があれば、いろいろ援助つきでやりたいことは出来るんですね。カードを使う前に、この人は選挙のことが理解できないか

らさせない、というのではないんです。何とかなるんです。こういう発想をするのが行動分析の発想です。

これはちょっと禅問答みたいですが、「×から○」「○から×」という言葉があります。昔、私の師匠がいていたんですが、いま寝たきりになってしまったので私が勝手に言っているんですが、いままでわれわれは、援助の対象となる人について、「今は×だけれどそのうち○にしよう」という態度でいる。よりよきものにしようという発想でやってきてしまっている。今、何かマイナスの問題があって、それをリハビリテーションとかいろいろなことをして○にしようという発想でやってしまいがちです。これ、もちろん×から○になるのは前向きだとは思いますが、いまを否定してしまうのは、ネガティブに相手を扱うというのは、やっぱりいろいろなプレッシャーとか問題点を生むんです。

ぼくも実は若い頃は、行動分析のテクニックのいろいろなものを知って、よーしというので、前にいた職場が愛知県コロニーという障害者の施設なんです。全員トレーニングによって「普通の人にしてやるぞ」という大宣言をしちゃった。「×から○へ」という発想だった。これは大きな間違いだった。これでは人は伸びない。伸びないというか、よくならないんです。そこでぼくの師匠がぼくにいった。「お前、○から×へと考えないとだめなんだぞ」。この発想はどういうことかという、ともかく今を認める。どんな問題行動をもっている人でも、それなりの必然があって今があるんだ。今を認める、今を○として考えるということです。それで、時間的に流れて、先にいったら、やっさもっさして、よくなったときに、あとになって考えてみよう、「あのころは×だったね」と。

「今は○」と考えないといけない。先にいって、過去を振り返って、あのころはいまいちだったなと考えないといけない。決して、いまダメだマイナスなものをまとも（○）にしようとは考えない。いま○だ○だ！と認めてこそ、はじめてひとは行動を成立させる。「×から○でなくて、○から×」は、われわれの合言葉になっています。これはさっきの行動分析の発想でもある。今を認める、今できることを評価する。それによってひとははじめて自発的に行動する気になって、最後は少しできるようになる。そこをすかさずまたバックアップする。そういうやり方をする。

ですから同じ時点をとらえてみるといつも○なんです。今は○。先にいっても、今は○。いつも今付き合っている相手を○として扱わないといけない。けっこう根性は要る場合があります。力技ではあります。しかし、これは少なくとも職業的な対人援助の人にとっては必要なものだと思います。

**「いま」を認める＝今できる行動を  
正の強化で維持する**

**行動分析学の技法：**

- トークンエコノミー (Token Economy)  
一般の価値をいったん離れて、ある集団の中で、「いまできる行動」に対して「代理貨幣」(トークン)を示す。また、その代理貨幣を使って様々な物や権利を買うシステム。  
givenではなく、getの状態を作り出すことで、本人の自発的行動を生み出していく。  
**就労のための訓練ではない。**  
最近のエコマネーのシステムと共通する

### トークンエコノミーとFSJG：

今までのところは、ちょっと行動分析学の精神論的(思想的)な話なんです。ファーストステップジョブの「仕事をする」ということにかからめて、具体的な技法に関して、行動分析学では昔から何がされてきたか。

有名な技法に「トークンエコノミー」というものがある。ご存知のかたがいるかも

しませんが、「トークン」というのは代理貨幣です。本当のお金ではない。本当のお金の

価値がくっついていない。一般の価値をいったん離れて、ある集団のなかで、今出来る行動の中で代理貨幣を使う。代理貨幣を使ってさまざまなものを強化する。精神病院で、じーっとして行動を起こさなくなっている人に対して、なんとか自発的に行動を起こさせるために、なにか今できることに点数をつける。それをやったらいくらというはっきりした評価をしていく。そのトークンで、実際の生活の中で物を買ったりする。実は、この初期の研究は大問題になりました。当然の人間の権利があることを、買わないといけないのか。あるいは病院の中で働かせるのか。そういう言い方で批判されたんですが、さっき申し上げたように、精神病院とか刑務所では、「ギブン=given」の状態になってしまう。何もしない。何かしたこととは無関係にご飯が出てきたり、報酬が与えられたりする。そうすると人間は行動しなくなっちゃう。何もできなくなってしまう。しーんとしてきてしまう。これが一番よくない権利の剥奪だと、行動分析（スキナー）は考える。行動の機会を奪ってしまう。ゲットする機会を奪ってしまう。ただご飯を一方的に与えるほうがまずいことです。一方的に与えれば、口をあければご飯が入ってくるというほうがまずい。何でもいいからともかく行動することによって、自分で得たんだという実感を得させないといけない。そのためのシステムなんです。それでわざとトークンエコノミーというかたちをとって、自発性、やる気を増していく。

FSJG では、このあたりのことを上田さんがよく勉強していて、それを「仕事」（ジョブに対して報酬を得る）という行動の最初の段階で使って、それがいま、社会に広がった段階ともいえる。実際にはもちろん、実際に使えるお金を使うから、もっとリアルです。トークンエコノミーは、最近では、聞いたことがあると思いますが、エコマネーという形で展開しているともいえます。その地域でしか使えない、でもいままで、お金がつかなかったようなものにも価値を意図的にうみだしていく。例えば、助け合いというようなことに対して、はっきりとそれを「マネー」で価値を顕在化して、みんなで照れずにできるようにする。逆に無料でやると照れてしまうけれど、エコマネーをもらえると、逆にやりやすくなる。行動を引き出すためのひとつの手段としてエコマネーがあり、その部分が昔のトークンエコノミーと類似した部分があります。

この FSJG の、さっき上田さんが発表したような 500 円とか 1000 円という値段づけは、ある意味では、一般的な市場の値段とは少し違う。これもある種バーチャルな部分もあるんですけど、さっき言われたように、これは就労のための訓練ではない。結果として、就労に結びつきつつありますが、とにかく自分で何かをしてお金を得て社会から評価される。それでまた買い物をするという基本的な社会参加をするためにある。そういう意味ではエコマネーとかのシステムとも似ているということです。

これはもうすでに上田さんが話をしたので、FSJG の特徴をこれまで申し上げたような形でまとめてみると、社会的評価を得る、ゲットを援助つきで成立させるということです。ドタキャンでも OK。「かくあらねばならない」という就労の訓練ではない。現在でもできる行動を評価する環境を創ってしまう。とても大切なものは正の強化。この「やりたい」と思う裏には、やはり自己決定がある。自分で選んでやれる。その状態を子どもたちが普通なかなかやれないんですが、さっきいったようにメニューを配り、やりたくないという選択肢も含めたジョブのメニューを配るというやり方で実現していますよね。本人がやれそうな、正の強化を受けそうな複数の選択肢を用意する。FSJG の仕事の配置には、そうい

う特徴があります。ここでやっている工夫は、あくまでも「仕事の成立を援助すること」であって、本人の属性をいじろうとかいうことではない。これを使って、なんとかさんの性質を変えようとかいうことは言っていない。あくまでも仕事の成立を助ける。じつにさわやかな関係なんですね。本人の属性とか過去の歴史、そんなことは関係ない。そこもじつにユニークです。これまでの心理学が好きな本人の属性とか過去の歴史、家族関係とか、そんなものを一切とっばらったところにユニークな点があるし、これが行動分析の真髓と一致するんです。行動を成立させる。表面的なようなんだけど実はさわやか、それゆえに奥深いんです。

### ジョブグループであることの意味

- ジョブ交換という必要性は、**個別の「親子」という閉鎖的空間を越えた関係を越える**
- 「かくあるべし」と、つい焦りがちな個別の親による（あるいはその親に対する）支援ではなく、**「グループの作業と成果」という形で自己評価・激励していくことが可能になる（仲間強化で支える）**
- 援助者が、「援助行動」について**「正の強化」をうけやすい → 対人援助で重要**

**グループであること：** さて、さらにジョブ「グループ」であるということ。これは上田さんが言っていたみたいに、最初は、ひとりで呼びかけてやろうとしていたんですが、そのころはやめたほうがいいんじゃないみたいなことを僕も言っていた。グループになったことで、「交換」（ジョブとしての労働と報酬）という必要性が出てきて、そのことは、個別の親子という空間を超えざるをえない。だから親子でし

んみり悩んでいる暇はないわけです。

つい、「かくあるべし」と、ぼくも親だからわかりますが、自分の子どもだけみていると焦り勝ちになってしまいます。そういう狭い環境だけを支援するのではなく、あるいは自分のことだけをみつめなおすのではなく、さっきグラフを出しましたよね。グループ全体でこれだけいっている。こういう形で、自己評価とか、お互いに激励していくことができる。「仲間評価」と書きましたが、これはじつは非常に重要なポイントなんです。仲間で評価できるという状態をつくっていく。自分の子ではなくても、なんとかさんと一緒にやることで活動が「正の強化」で維持される状態をつくっていく。

そのことはまさに、援助者が援助行動に対して、正の強化を増やす。大切なのは、もうひとつは周りにいるひとたちです。それを援助する人たちも、やっぱり楽しくやっていかななくてはならない。対人援助は、目を三角にしてやってもだめなんです。つい親子で、マンツーマンでやるとどうしてもそうなる。グループで仲間評価を得て励ましえるという点で、グループは大切な要素です。

### FSJGの方針

- 「ひきこもり」という問題に関して、**仕事成立という具体的な課題へ対処することで、哲学や精神論的なエンドレスな議論を繰り返すのではなく、「いま、何が必要なか」を明確に示そう。**
  - 「仕事」という必然的に社会に開かれた行動の成立に焦点化することで**「おかしな心理主義」ではない対人援助の形を作ろう。**
  - 「仕事成立への援助」は**多くの関係者が参加しやすい（専門家の「ひきこもり」を許さない）**
- 従来の心理学・福祉学等を越えた対人援助を巡る「連携」のひとつの在り方を期待する。

ここまでお話してきたような問題、非常に当然のようですが、今まで、学問・研究領域でもあまりこういうのはなかったんです。どういうことを FSJG が切り開いてくれたか。これは仕事成立という具体的な課題に対処するというのは、哲学や精神論によって、ああでもないといつまでも喋って、エンドレスな議論を繰り返すのではなくて、明快に何が必要なかを示すことができる。選択肢がないじゃん、

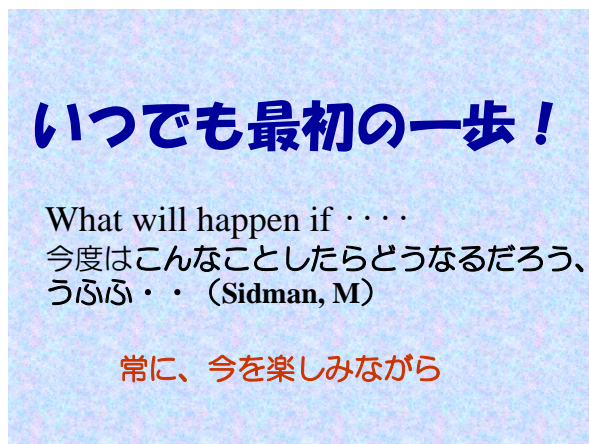
金が足りないじゃん。そこへ問題を落とすことが出来る。親子関係が悪かったとか、ぐじゃぐじゃエンドレスなことは言わないんです。仕事をするために何が足りないのか、すつ

きりした話題にすることができる。

「仕事」(ジョブ)は必然的に社会に開かれたことを焦点化していくわけですから、(なにか心理学を目の敵にしているようですが)、おかしな心理主義にはならないのです。心理主義というのは、斎藤環さんなんかも散々批判していますね。

もうひとつは、「仕事成立への援助」という共通のミッションは、いろんな人が参加しやすいんです。マンツーマンでやっているのと、それこそカウンセラーとか精神科医しか入れないんですが、「仕事がありません」というニーズは、様々な領域の人を参加させやする。きょうは「きょうと NPO」の野池さん(註)なんかもきていますが、いろんなひとがうちでちょっと仕事をやってもらおうとか、そういうかたちで参加してもらえる。要するに心理学や福祉学とか学問領域を越えた、対人援助をめぐる、これまで言葉では繰り返してきてきたんですが「連携」をほんとうに実現させるひとつのありかたになっている。

FSJG は、立命館大学もバックアップしていますが、この FSJG をめぐって学内でもいろんな人が出会えた。たまたま、ぼくは上田さんと昔から知っていて心理学のほうでゼミの中で一緒にいましたが、他学部の社会学や福祉などを専門にしている方も、このグループをめぐって、なんだなんだと集まってきた。心理と福祉はもともと仲が悪いんです。お互いに相手がなくなればいいというぐらい仲がわるかった。でもそうでもないな、と。うまく仕事をやっていくことにはどうすればいいのか、を課題として仲良く集まれる。それを切り開いてくれたパイオニアなんです。ぼくはそのことを非常にうれしく思って感謝しています。



### いつでも最初の一步!

最後になりますが、「いつでも最初の一步」が、きょうのテーマです。二歩、三歩先を考えるのではなくて、いまどうなのか。過去を考えるよりも、いま次の一步をどうするかということを考える。オーダーメイドで正の強化をみんなが出せるか。

ちょっと英語になりますが、「I wonder what will happen if...」というのが行動分

析の指針。分かりきったことを研究するのではなく、「こんなことやったらどうなるだろうか、うふふ」という好奇心に満ちてやっていく。楽しくないといけないんです。ひきこもりをめぐるっては深刻な問題もあるし、楽しめなくなっちゃうこともあるので、そういうかたちで援助したいと思います。どうもありがとうございました。

**司会:** なかなかこういう話、引きこもりの話でニコニコしながら伺うことは少ないんですが、分かりやすくて。